共同研究プロジェクト「表象に関する総合的研究」
2008 年度第二回研究会

日時：2008 年 11 月 8 日（土曜日）、1 時半より 6 時まで。
場所：AA 研小会議室
報告者とタイトル
1. 原　毅彦氏（AA 研共同研究員、立命館大学）
　「『密林の語り部』は何を語るか」
2. 浅井　雅志氏（AA 研共同研究員、京都橘大学）
　「「見る者」と「見られる者」―旅における他者表象と自己表象のダイナミクス」

報告要旨

「『密林の語り部』は何を語るか」

「民族誌 ethnography」のなかに「民族」と「誌-graphy」を見いだし、この「誌」にどのような文法が、あるいは、どのような作法があるのかを問うことは、いまやそれほど不思議なことではない。歴史（記述）の文体（P.ゲイ）も然り。「文化を書く」と言う自意識からあまたのニュー・エスノグラフィがあらわれた。他方、記述の対象である「民族」も「文化」も、その影をますます薄れさせているのも周知の事実。一体、何を、どのように記述しているのやら。「本質」はいまいずこ？「実体」はあるのやら、ないのやら。

名づけ得ぬものを、かたり続ける？息をつづける？テープになっても（ベケット）。はじめにあった「ことば」を追い求めて、さまよい続ける？影ではない、写しでもない、還元不能な「ことば」に向かう旅。「語り部になることは、嘘のようなことに不可能なことを付け加えること」（257）。語り部を求めて、作家バルガス＝リョサの神殺しの旅がはじまる。

『密林の語り部』（1987）はペルー・アマゾンのマチゲンガ社会を描いている。語り手のテレビ番組のテーマでもある（「バベルの塔」というバルガス＝リョサ自身がもった番組）。物語りは、フィレンツェで彼がマチゲンガの写真にであうことからはじまる。写真に写っているもの、語り部への旅。たくさんのメディアを越える旅。民族学者の、言語学者の、ドミニコ会布教者の民族誌、神話記述、歴史、神話、そして語り、あるいは息へ。こうして「何か」を表現しているメディアを越えて、「何か」へ、「実体」へ、「ことば」への旅が語り手によって誘われる。その旅には先達がいた。

語り手の友人、ユダヤ人にして民族学を学んだ男も、ある時から民族誌を越える旅に出た。マチゲンガ人を語る記述から、マチゲンガ人へ、参与観察から、それ自身へ。旅はここで終わらない。ディアスポラに果てはない。「マチゲンガ」という「民族」のさらに向こうへ。それは「人間（マチゲンガ）」を越える旅でもある。「民族」にも「人間」にも還元

できないものへ。「行け、歩きはじめるのだ。語るのだ、語るのだ。語り部よ、世界の秩序を曲げてはならない」(206)。歩くのを止め、放浪を止め、語るのを止めることは、秩序を破壊し、朽ち果てること。こうして彼自身が「語り部」となって「ことば」を発し続ける（クラストルのグァラニ民族誌を想起せよ！)。

バルガス＝リョサも語り続けている。『楽園への道』(2003) についで『不可能の誘惑』(ヴィクトル・ユゴー論）(2004)、『オデュッセウスとペネロペ』(2007)、小説に評論、劇と（この区分の意味は何だろう？)。「神殺し」を論じたマルケス論（1971)、民族学者でもあった「ふたつの貌」(J.ムラ）を持つアルゲダス論（1977)、『果てしなき饗宴』のフロベール論（1975）から「不可能の誘惑」へ。いずれも、小説の向こうへ、記述を越える旅の先達が語られる。何かを語る、報告する、記述するバルガス＝リョサ。アンデスの農村ウチュラハイで起きたジャーナリスト殺害事件の真実究明報告書（1982)。19 世紀末ブラジルの神の国を目指したカヌードス反乱を描いた『世界終末戦争』(1981)、『サルトルとカミュの間で』(1981）の問題。「政治と文学」なんてものはない？「芸術と実人生」なんてものもない？『密林の語り部』直後からのペルー政治への介入、大統領選落選（1990)。

バルガス＝リョサのマチゲンガ人は、放浪する民である。くり返しくり返し強調される非定住生活。彼らには土地の所有意識がない？80 年代に彼らの居住地域に石油資源が発見されると、資源開発戦争が国際化する（253)。「マチゲンガ族にとって歴史は前進も後退もしていない。めぐり、繰り返している。しかし、これらすべてから部族は大きな打撃を受けたが、近年の社会の変動を前に、おそらく、彼らの大部分は伝統、すなわち離散（ディアスポラ）を思い起こすことによって、生き延びることにしたのだろう。神話のなかに絶えず現れてくるように、もう一度放浪に出ていくことで」(254)。国際的な石油産業と、ペルー国家を相手に、先住民の土地の権利をめぐる議論は近年やっと活発化してきている。「民族誌」的に、放浪の民でもなく、非定住民でもないマチゲンガ人は、もう一度放浪に出ていくことはしない。したがって先祖伝来のテリトリーに暮らすマチゲンガ人は、その土地の権利を主張し、開発という名の破壊、収奪に抵抗の声をあげる。残念ながら、『密林の語り部』の語りの方が売れている！

（原　毅彦）

配布物：資料（年表、『密林の語り部』抜粋）

「「見る者」と「見られる者」―旅における他者表象と自己表象のダイナミクス」

本発表では、なぜ人は旅に出たとき、そこで出会う他者を表象するのかという問いを立て、そこから派生するさまざまな問題、たとえば、表象とは何か、なぜ人は異質な他者に出会ったとき、類似性よりも異質性に注目するのか、などの問題を考察し、最後に、他者表象を真に意味あるものにするためには何が必要かを論じた。

人間の認知プロセスにはある種の偏向作用がある。つまり、首尾一貫した行動をとるために、一種の「信念体系」、すなわち自己の内部に作り上げてきた一貫した枠組みに外的な刺激をすべて押し込んで内的安定を保とうとする傾向がある。これが他者表象を必然的に捻じ曲げる、というよりも、自己表象の変奏曲にしてしまうのである。換言すれば、「見る者」、すなわち「観察者が認識していると思い込んでいるものは、実は観察者がそこに投影している自分自身の無意識の内容」（ユング）なのだ。

こうした認知プロセスの投影性は他者表象に大きく影響する。これまでに書かれてきた膨大な数の旅行記も、この「投影的他者表象」を免れることはできなかった。本発表では、モンテーニュ、新世界の発見者・探検者による先住民表象、D・H・ロレンスの旅行記などを材料にしてこの他者表象の特質を明らかにしようとした。さらには、E・サイードが『オリエンタリズム』で問題にした「知のヘゲモニー」を取り上げ、西洋の他者表象の中にも例外的にはこの「ヘゲモニー」を脱構築するようなものもあったが、たとえばロレンスのそれなどは、無意識のうちにこの「ヘゲモニー」を前提にしてこうした投影的他者表象をしていることを示した。つまりロレンスは、この「ヘゲモニー」を前提にした上で、他者の表象を一種の「出汁」にして、観察から自己の思想の開陳へと飛躍することが多いことを論じた。

「投影的他者表象」は角度を変えてみれば他者に対する「ラベル貼り」である。つまりそれは、異質な他者を理解するという、しばしば苦痛を伴う努力を省くための、あるいは自分の世界観を変えずに他者をその中にうまく位置づけようとする試みであることを明らかにした。ブルーノ・タウトの「日本美」の賛美も、それに激烈に反発した坂口安吾も、この「ラベル貼り」の変奏曲に過ぎない。これは、明治日本にやってきた「お雇い外人」を含む外国人が書き残したものの多くにも認められることである。この現象は近代の他者理解欲求が生み出した典型的な学問領域である文化人類学にもはっきりと認められる。この傾向は、西洋人が見せる「自らが破壊し、変容させてきたのに、その土着文化の消失を嘆くという奇妙なノスタルジア」を指摘するR・ロザルドや、「急速な変化によって本質的な何か（「文化」）、首尾一貫した固有のアイデンティティが消えるという仮説に強い疑問」を抱き、そのような言説を「サルベージ民俗誌」と呼ぶJ・クリフォードらによってすでに内部から批判されてきている。

こうしたさまざまな問題を含む他者表象を意味あるものにするには、他者表象は無意識裡の自己表象であることを常に念頭に置き、他者の異質性に着目し強調するよりも、自他の違いを認識しつつも、「他者の中に自己を、自己の中に他者を発見」しようとする作業双方向的に行い続けることにしか道はないであろうと結論した。

（浅井雅志）

配布物：論文草稿